



| | |
|------------------|---|
| Title | 第二期国定修身教科書の「忠義」及び「忠君愛国」の教材の背景：日露戦争に着目して |
| Author(s) | Barrows, Jason S. |
| Citation | 教授学の探究, 16, 123-134 |
| Issue Date | 1999-03-05 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/13613 |
| Type | bulletin (article) |
| File Information | 16_p123-134.pdf |



[Instructions for use](#)

第二期国定修身教科書の「忠義」及び 「忠君愛国」の教材の背景

—— 日露戦争に着目して ——

Jason S. Barrows

(北海道大学教育学部研究生)

はじめに

第二期国定修身教科書は、「忠義」及び「忠君愛国」といった教材を各学年に満遍なく取り上げている。修身教科書がなぜ「忠義」及び「忠君愛国」といった内容を教材として取り入れたのか、その動機を当時の社会的状況と照らし合わせて究明し、教材に付された国家権力の意図推察する。

1. 第二期国定修身教科書にみられる「忠義」及び「忠君愛国」の教材

まずはじめに、第二期国定修身教科書¹⁾に登場した「忠義」及び「忠君愛国」²⁾の記述を見てみよう。

(1) 第一学年用『尋常小学校修身書』巻一では、日清戦争におけるラッパ手の陸軍歩兵二等卒木口小平の戦死が第十七「チュウギ」の教材として取り上げられている。児童用書は、巻一の第十五までが挿画のみであり、第十六「テンノウヘイカ」から文章と挿画の組み合わせで構成されている。第十七「チュウギ」は児童が文章に触れる第二番目の教材である。児童用書は「キグチコヘイハ ラッパ ヲ クチニ アテタ ママ シニマシタ。」³⁾と説き、日清戦争の緒戦である1894(明治27)年7月29日の成歎の戦闘でのラッパ卒の軍国美談を載せている⁴⁾。教師用書には、木口小平が松坂大尉に従って、ラッパ吹奏の命令を受け、「敵前数歩の所にありて、少しも恐れず、勇ましく進撃の譜を奏すること三度に及びしとき、忽ち弾丸に中りて斃れたり⁵⁾と解説し、「諸子よ、日本人たるものは、天皇陛下の御命令あらば、勇んで戦場に出でざるべからず。一たび戦場に出たるものは上官の命ずるままに火の中、水の中にも飛び入りて天皇陛下の御ために尽くさざるべからず。」⁶⁾と「忠義」の実践に言及している。ここで、木口小平の実例は「天皇陛下に忠義を尽くしたるもの」⁷⁾として役割を果たしている⁸⁾。第一学年という小学校教育の最初に、このような実在の人物の壮絶な戦闘死の例が教科書に登場するのである。

第二学年用『尋常小学修身書』巻二では、日露戦争初頭の旅順港閉塞作戦⁹⁾が第二十「チュウギ」の教材として取り上げられている。児童用書は「日本ノ カンタイ ハ ロシヤ ノ グンカン ガ 出ラレナイ ヤウニ リヨジュンコウ ノ ミナトグチ ニ フネ ヲ シヅメマシタ。 ソノトキ ワガ グンジン ハ イノチ ヲ ラシマズ イサマシク ハタライテ チュウギ ヲ ツクシマシタ。」¹⁰⁾と説き、旅順港閉塞作戦での日本海軍の軍国美談を載せている。教師用書には、閉塞作戦において日本海軍の連合艦隊司令長官の東郷平八郎¹¹⁾がこの作戦を図り、第一次閉塞では「閉塞隊を組織せんがために、艦隊に令して其の隊員を募りしに、応

ずるもの甚だ多く、其の選択に苦しむ程なりき」¹²⁾と述べ、閉塞隊がロシア軍に発見されて攻撃を受けると「弾丸雨霰の如く武装なき我が汽船に降りそそげり。乗員はもとより死を決したる忠義の士のみなれば、少しも屈せず、勇ましく突進して、そく其の任務を尽せり」¹³⁾と解説している。さらに、第二次、第三次閉塞でも志願兵は多く、「其の忠勇義烈人をして感動せしめたりとぞ」¹⁴⁾と説いて「忠義」の実践を言及している。けれども、旅順港閉塞作戦での戦死者は、第一次では一等機関兵1名のみ、第二次では指揮官の広瀬武夫¹⁵⁾と兵曹長の杉野孫七、一等機関兵1名のほか、閉塞隊員収容隊の一等信号兵曹1名の合計4名に過ぎず、隊員のほとんどが戦死か生死不明となったのは第三次のみであった。¹⁶⁾さらに、第三次まで続いた作戦はロシア艦隊が港外へ出撃する意欲を失わせる効果を果たすことになるが、閉塞作戦自体は成功しなかった。¹⁷⁾

第三学年用『尋常小学修身書』巻三では、第二十「忠君」の教材として和氣清麻呂が取り上げられている。第四学年用『尋常小学修身書』巻四では、第三「忠君愛国」の教材として谷村計介が取り上げられている。第五学年用『尋常小学修身書』巻五では、第三課及び第四課「忠君愛国」の教材が取り上げられている。第三課「忠君愛国」では弘安の役での河野通有を取り上げ、第四課「忠君愛国」では楠木正成が取り上げられている。このように、第三学年から第五学年までは、明治期以前の戦役や御神託の読み物が取り上げられている。

尋常小学校の最終学年である第六学年用『尋常小学修身書』巻六では、第六課「忠君愛国」の教材として日露戦争が取り上げられている。児童用書では、日露戦争時の陸海軍人について「陸海軍人は寒暑ををかし苦難をしのぎて勇戦し、或は弾雨の中に平然として其の任務を尽し、或は負傷すれども後送せらるることを否みて飽くまで戦場に立たんことを願ひしなど、忠誠勇武なる美談甚だ多し」¹⁸⁾と説き、陸海軍人以外の国民については「国民はいづれも勤儉を事として多大なる戦費を負担し、進んで恤兵事業、軍人家族の救護、戦死者遺族の慰謝等に力を尽したり」¹⁹⁾と説き、国民の女子については「特に出征者の妻が心を励まして一家の事に当り、夫をして後顧の憂なからしめ、高き身分の婦人が或は手づから繃帯を製し、或は篤志看護婦となりて救療の事に当りしが如きは、女子として、戦時の務を尽くしたるものなり」²⁰⁾と説いている。

第二期国定修身教科書は始まりが日清戦争、次に日露戦争と近況の戦争が続く、中間は歴史的読み物に徹し、締めくくりが日露戦争で構成されている。一項目では、特に、第六学年の日露戦争の取り扱いが、陸海軍軍人のみではなく、国民一般にまで及んでいる。日露戦争の勝利の後、次の戦争に備えた意識をもつことを子ども達に要求し、「忠君愛国」の実践を奨励しているのである。

そこで、日露戦争が当時どのような規模の戦争で、どのような戦局を経たのか、兵士達の戦争での意識を調べ、日露戦争が第二期国定修身教科書にもたらした影響を考察する。

2. 日露戦争の経過概略 ー日本陸軍の苦戦ー

(2.1) 戦死傷者の増加

1904(明治37)年2月5日の御前会議において、日本はロシアと開戦を決定し、午後9時30分に第十二師団に臨時派遣隊の編成と韓国への派遣命令を下した。翌日には、近衛、第二、第十二の野戦師団を基幹として第一軍の動員が命じられた。近衛、第二師団は3月11日に朝鮮半島西北端の鎮南浦に上陸し、4月末には第一軍の三個師団が清国東北部の鴨緑江地帯に集結した。また、第一、第三、第四師団と野戦砲兵第一旅団からなる第二軍は5月5日に遼東半島に

上陸した。旅順港要塞を陸上から包囲攻撃するために第三軍が5月末に編成され、6月に大連に上陸した²¹⁾

日露戦争での地上戦として主要なものは、1904(明治37)年5月26日の第二軍の金州・南山の総攻撃、同年8月24日から9月4日までの遼陽会戦、同年10月中旬の沙河会戦と同年12月末の沙河対陣、1905(明治38)年1月25日の黒溝台の戦闘、同年2月23日から3月10日までの奉天会戦を経て北上していった戦闘と、1904年6月から12月末までの第三軍の旅順攻略戦がある²²⁾日清戦争の主要会戦である平壤、旅順、威海衛、牛莊、田庄台の戦闘がみな1日で決つたのに対して、日露戦争の会戦は、遼陽会戦が2週間、沙河が12日、奉天が16日、旅順が半年も要している。日露戦争において、戦闘は長期化の様相に変化した²³⁾

どの戦闘も多大な死傷者を出して人的損害が増大し、苦しい戦闘の連続であった。第二の金州・南山の総攻撃では、ロシア軍の約2万の兵力に対して、日本陸軍が約3万6400の兵力、野砲216門、機関銃48挺を駆使し、夜明け前から約14時間も戦闘が続いた。日本陸軍は約4400名の死傷者を出して、参加した将兵の約12%にも相当する人員損害を出した²⁴⁾また、遼陽会戦では、ロシア軍の約22万の兵力に対して日本陸軍が12万7360の兵力で攻撃したが、およそ17.9%にあたる2万2763人も死傷者という多大な損害を出した。それにも拘わらず、戦局を決するには至らなかった²⁵⁾また、沙河会戦においては日本陸軍は13万1042の兵力のうち1万8040人の死傷者を出し、黒溝台の戦闘においては10万771の兵力のうち9162人も死傷者を出した²⁶⁾奉天会戦においては、24万6081の兵力のうち27.2%に当たる6万6930人も死傷者を出した²⁷⁾

さらに、日本陸軍の第三軍における旅順総攻撃は、8月の第一回総攻撃が連続六昼夜にわたった強攻策であったのだが失敗して、約5万700の兵力のうち約29.5%に当たる1万4934人も死傷者及び生死不明者を出して中止された²⁸⁾そして、10月26日から11月1日までの期間の第二回総攻撃においては、約4万4000の兵力のうち約3800人の死傷者を出したが、ロシア軍の堡壘を崩せずに中止された²⁹⁾11月26日から12月6日までの第三回総攻撃においては、ロシア軍の死傷者数が4000人と推定されているが、その一方で日本陸軍は約6万4000の兵力のうち約26.6%に当たる約1万7000人も死傷者を出した³⁰⁾旅順攻略全体においては、日本軍は13万の兵力を動員して、戦死者15400人、負傷者44000人、合計59300人の人的損害を出して苦戦した。このように、苦戦の連続は多大な人的損害を出し、日清戦争の戦死者(病死を除く)が1600人であったのに対して、日露戦争の戦死者は8万5千人を越えていた³¹⁾

また、苦戦の連続による戦死傷者は下士以外の兵士達であった³²⁾さらに、戦闘参加人員のうち死傷率の高さは、兵種別でみると、歩兵が最も高く、続いて工兵、野戦砲兵の順であった³³⁾日露戦争に動員された陸軍軍人の総数は108万8996人であり、その中で戦地勤務として出征した者は94万5394人であった³⁴⁾そのうち、戦闘死者数は6万29人に達し、戦闘死者総数のうち歩兵数は93.2%にあたる5万5955人にも達した³⁵⁾入院以上の重度戦傷者を加えると、歩兵の戦闘死傷者数は全戦闘死傷者数の92.9%に達し、出征軍人の歩兵総人員の34.2%にも達していた³⁶⁾

このように、1904(明治37)年2月5日から1905(明治38)年8月10日まで長期化した日露戦争において、戦闘死傷率は歩兵の圧倒的な高率を記録し、最前線まで戦わされた歩兵達が大きな犠牲を払ったことがわかる。

(2.2) 兵器の発達

日露戦争では、火器の威力の増加に伴って世界の軍事史上に特記される戦闘の様相の変化が起きた。日露戦争開戦時、日本陸軍が装備していた主兵器は、歩兵と工兵が三十年式歩兵銃、騎兵と輜重兵が三十年式騎兵銃、野戦砲兵は三十一年式速射野砲または三十年式山砲であった³⁷⁾

日露戦争開戦前に日本陸軍が保有していた歩兵銃は合計 63 万 5183 挺であり、三十年式歩兵銃は 25 万 831 挺、村田連発歩兵銃を 12 万 3848 挺、村田歩兵銃を 15 万 97 挺保有していた。また、騎兵銃は合計 5 万 39 挺であり、三十年式騎兵銃を 3 万 314 挺、村田連発騎兵銃を 9 万 999 挺保有していた³⁸⁾ 三十年式小銃（歩兵銃および騎兵銃）の生産については、主に東京砲兵工廠で行われ、1898 年（明治 31）年 11 月から 1904（明治 37）年 1 月までに 28 万挺余、平均月産高 4460 挺に達するほど量産されていた³⁹⁾

日露戦争においては連発小銃の実用化が可能になった要因は、無煙火薬の技術であった。これまでの黒色火薬では銃を発射した後に銃口が煙で覆われて直ちにねらいをつけられなかったが、無煙火薬は連続して銃を発射することを可能にした⁴⁰⁾ さらに、黒色火薬を使用した村田銃は口径 11 mm、弾丸重量 27 g、初速 460 m であったのに対して、無煙火薬を使用した村田連発銃は口径 8 mm、弾丸重量 16 g、初速 594 m であり、さらに無煙火薬を使用した三十年式歩兵銃では口径 6.5 mm、弾丸重量 11 g、初速 700 m にもなった⁴¹⁾ つまり、無煙火薬の技術は、弾丸の軽量化と連発効果を上げ、初速の増大も可能にした。そして、弾薬の軽量化と口径の縮小化による銃の軽量化によって携行弾薬量の増大が可能になった。さらに、弾薬の軽量化と初速の増大によって射程の延伸と命中精度の増大ももたらされた⁴²⁾

そして、日露戦争では、機関銃の重量を軽減し、射撃速度を増大する技術開発によって、機関銃も本格的に使用された⁴³⁾ 以上のことから、日露戦争は技術的に完成された機関銃、連発小銃といった銃器を武装した歩兵の大兵力が衝突した戦争であったことがわかる。

加えて、日露戦争で日本陸軍の歩兵が消費した銃弾は、例えば、金州・南山の 1 日の戦闘で約 220 万発、24 日間の奉天の戦闘で約 2156 万発にもものぼった⁴⁴⁾ 1870-71 年の普仏戦争における半年間の戦闘でドイツ軍が消費した銃弾が 2500 万発であったことから⁴⁵⁾ 日本陸軍の消費した銃弾が極めて多く、それだけ激しい銃撃戦であったことが推測できる。

(2.3) 戦死傷原因にみる火器の発達

日露戦争において、戦死傷者の原因は、銃創が 79.7%、砲創が 16.9%、爆傷が 2.5%、白兵創が 0.9% の順であった⁴⁶⁾ 戦死傷者の大部分は銃創が原因であり、銃創による全死傷者数は 14 万 9040 人にも達していた⁴⁷⁾ また、砲創については、砲創による死傷率が遼陽会戦では 11.9%、沙河会戦では 12.4%、奉天会戦では 13.0%、旅順第一回総攻撃では 20.6%、旅順第二回総攻撃では 26.7% と、一戦闘ごとの砲創による死傷率は高くなっていった⁴⁸⁾ その一方で、刀剣や銃剣などによる白兵創が原因である比率は低く、白兵創による負傷者の 82.7% は入院せずに在隊で治癒するほど軽かった⁴⁹⁾ このことから、技術的に発達した火器を中心に戦闘が展開され、戦死傷者を多数もたらしたことがわかる。

特に、銃創について、創傷を受けた部位ごとでみると頭部が 39.2%、胸部が 26.9% と死亡率が高く、特に頭部の銃創による死亡率は全戦闘死者数の 40.0% にも及ぶほど圧倒的であった⁵⁰⁾ 銃創による入院後死亡率をみると、頭部が 17.8% と高く、特に化膿しやすい腹部が 33.8% と圧倒的に高かった⁵¹⁾ その上、全銃創患者のうち、入院せずに在隊のまま治癒したものは 5139 人し

かいなく、銃創による患者は入院を余儀なくされ、さらに、戦地病院での治癒率が低く、日本の病院への後送率が高かった⁵²⁾このことは、銃器の殺傷力がいかに強かったかを意味している。

(2.4) 戦場の惨状

日露戦争において、多数の戦死傷者が出て、戦闘の長期間にわたる連続の様子を、その当時、週刊『平民新聞』は伝え続けた。週刊『平民新聞』第四十九号（明治三十七年十月十六日刊）では、米国の Chronicle 紙と英国の Daily 紙を参照して「旅順戦場の惨状」という記事を発表して、「岳陵の半麓塹壕に堆積せる日本軍の死屍は、之を埋葬するを得ずして、空しく風雨に暴露され居り、臭気劇甚⁵³⁾と悲惨な状況を伝えている。第一回及び第二回旅順の総攻撃は、「八月十九日より開始されたる第一回の総攻撃は突撃に突撃を重ね、多大の犠牲を払いたるも成功しなかった⁵⁴⁾」「九月十九日より始められた旅順第二回の総攻撃は、二十二日に愈々不結果を以て終りを告げた。死傷四千七、八百名という犠牲を払いしに拘らず、多大なる準備に酬ゆべき何等の收穫なし⁵⁵⁾と『機密日露戦史』にあるように、多数の戦死者を出しながらも戦局を収拾できず、失敗の連続であったことは明らかである。

さらに、週刊『平民新聞』第四十五号（明治三十七年九月十八日刊）では、「旅順や遼陽での死人の数が一向分らぬ、分らぬ丈け夫れ丈け危懼の念が増す、是迄熱心に戦争を煽動した人でも此頃は小首を傾け始めた⁵⁶⁾と長引く戦闘への不安感が世論にも広まってきていることを載せている。

(2.5) 戦意喪失

週刊『平民新聞』第六十三号には、「第四師団騎兵西山正吉なる者は、旅順港攻囲軍に加はりて負傷し大阪予備病院にて療養したりしが、今回全快復隊することとなりしに旧臘逃亡し郷里和歌山県に潜みしを取押へられたり⁵⁷⁾と戦闘意欲を喪失して望郷の念にかられて逃亡した兵士について報じられている。

さらに、週刊『平民新聞』第五十五号（明治三十七年十一月二十七日刊）では、「驚くべき訓示」という記事を発表し、第十一師団参謀長石田が予備病院を巡視し、傷病兵に対して「汝等此処に來りしを本国に歸りしと思ふこと勿れ汝等の本国は満州なり只今は傷病の爲め風土佳絶の此の地に転地療養せるものと心得早く加養して本国満州に歸りて骨を埋めよ凱旋の歓迎を受くべきものは汝等なりと思ふこと勿れ汝等は奮戦激闘して満州の花と散るべし歓迎は本年末に現役として入隊出征せしものゝ一部が総代となりて受くべし行け々々否帰れ々々汝等は速に歸りて満州の土と化せ⁵⁸⁾と、激戦の戦地へ直ちに返って死を促している」と伝えている。このことから、兵士達は望郷の念を強くして、戦闘意欲を喪失していたと推測できる。

そこで、日露戦争の戦時下の兵役服役義務の強制において、兵士達の戦意喪失の表れを見よう。

(2.5.1) 兵役忌避

週刊『平民新聞』第十八号（明治三十七年三月十三日刊）に、「徴兵避の祈願」と題した記事が掲載されている。子や孫が徴兵適齢の年齢になれば、老人達は「如何にもして兵役を免れさせしがな、何々の稻荷大明神、何々の観音菩薩、さてはドコソコの大師権現など、老の身の苦

労も忘れて参詣し、一心不乱に祈願する」⁵⁹⁾と伝えている。その情景を「丹波国某地に城山稻荷大明神と云ふ神社あり、此明神は殊に徴兵避の爲めに効験著しと聞え、近郡近在は申すに及ばず、遠く十数里を距る地方よりも参詣絶えず」と伝え、特に「徴兵検査施行の始まる頃より抽籤の終る頃迄は参詣最も多く」、「抽籤の当日、父兄親戚の人々が多く供物を持ちて参詣し、昼は終日、夜は終夜、祈祷、堂籠、百度参などに一心不乱なる事なり」と伝えている⁶⁰⁾

召集令を受けた在郷下士卒⁶¹⁾の総人員は99万5695人、そのうち入隊人員は約91%に達するが、召集に応じなかった者が2万2994人に達している。そのうち、疾病が理由の者は1万3269人であり、それ以外は所在不明者と「無故」の者であった。陸軍服役条例によると14日以上旅行や他地への寄留による届け出を怠った場合は科料(5銭以上1円95銭)の罰則があったのだが、所在不明者は3447人にも達していた。その上、徴兵令第31条によると、兵役忌避は、1月以上1年以下の重禁錮刑に、3円以上30円以下の罰金刑が附加されるのに、理由なく召集に応じなかった「無故」の者が、所在不明者の数よりも多い3773人にも達していた。

「無故」として統計された者は、官公吏の地位についたり、進学して徴兵猶予者になったりして、徴兵を巧みに忌避することのできなかつた貧困層の者が大部分であった。特に、「無故」として統計された者のうち、後備役⁶²⁾における1000分比が最も高かつた。後備役に当たる年齢層が一家の生計を支えていた労働力であるため、召集に応じなかった例が多い。

(2.5.2) 兵士の自殺

陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第3巻第9編によると、日露戦争において、入隊後の自殺者数は198件、自殺未遂は14件、自傷は33件、詐病は11件、集計されている。また、『明治過去帳』⁶³⁾と週刊『平民新聞』によると、内地における下士卒自殺者の事例は、1904年には脱営中11件、軍事施設内1件の計12件、1905年には脱営中24件、病院内8件、監獄・営倉内・護送中4件、その他の軍事施設内7件の計43件が判明している⁶⁴⁾。1905年に、兵営および軍事施設内での自殺が増加し、1907(明治40)年7月送乙第2565号「下士以下ノ自殺者増加セシ義ニ付テハ、曩ニ陸軍大臣ヨリ訓示シタル所ニシテ」⁶⁵⁾と日露戦後に問題化した。

(2.5.3) 兵士のパニック逃走

日露戦争において、遼陽、沙河、黒溝台、奉天と北上する戦闘の長期化と損害の増大は、兵士の間には戦意の低下、パニック逃走を増加させていった。約2万2763人も死傷者を出した遼陽会戦でも、遼陽会戦の初期にあたる1904(明治37)年9月2日午後10時半頃、静寂の中、「突如凜として闇を劈く奇怪の叫声、発と思ふ瞬間に、驚破敵襲と兵士等は、喚き叫んで跳び上り、寝惚姿で狂奔し、手当たり次第に銃を解き、中にも気早やの連中は、壁を乗り越え躍り出すなど、極度の寂莫は、忽ち変じて極度の喧擾と化し、四百前後の兵等が、処も狭き囲壁内、喧々囂々右往左往する様は、宛ら蜜蜂の巣を投げ付けたるに髣髴したり」⁶⁶⁾と、一時的パニックが生じたことが報告されている。

さらに、戦線が進み、沙河会戦になるとパニックは敗走に至った。沙河会戦末期には、軍隊内に「補充兵は消耗兵なり、進撃喇叭は冥土の鐘なり」⁶⁷⁾といった言葉が流行し、戦意の低下が兵士達に表れていた。沙河会戦末期における万宝山戦では、山田支隊が大量の俘虜を出して敗走したことも報告されている⁶⁸⁾。敗走の様子は、「上下の愛も無く将は部下を棄て、走り部下は将を顧みず、東に南に蛛の子を散らすが如く逃れ去った。漸く友軍陣地に飛び込んだ日本兵に

は軍帽も小銃も身体に着いていなかった]」⁶⁹⁾とある。この時、敗走した後備歩兵第二十聯隊に100余名の補充員一小隊が夜間に合流したが、翌朝にはすでに戦死した者も多かった⁷⁰⁾

また、1905年3月9日の奉天会戦中の左翼第三軍の田義屯の敗戦においては、後備歩兵第一旅団が79人もの失踪者を出している。敗走の様子は、「敗兵の殆ど全部は銃を捨て剣もなく、或者は背囊や帽子を持って居ない。甚しいのになると脚絆も靴もなく全くの洗足のものもあつた]」⁷¹⁾とある。このように、銃器や、靴、帽子などの身につけているものは全て投げ捨てて敗走するほど、兵士達の戦意は低下し、戦線離脱の願望が強まっていたことがわかる。

さらに、パニックに陥った兵士達や敗走しようとする兵士達を止める方法として、上官である日本軍人が部下の日本軍人を殺すという、恐ろしい手段が戦場で採られていた。「日露戦役間出征軍中に於て『戦場に於て退く者は斬らん』の一項を法文に公然許すべしとの説ありて、補任課大いに研究の結果、この指揮法の必要あるを感ずるも、法文に許すは不可となすに決し]」⁷²⁾ともある。遼陽会戦の1904(明治37)年9月2日のパニックでは歩兵第二十一聯隊中隊長が「止むなく抜刀非常の手段に出て、遂に一二の犠牲者を出してやっとな鎮圧した]」⁷²⁾と報告している。さらに、田義屯の敗戦においては、退却せよとの中隊長の命令に反して小隊は死守するように命じた第一小隊長が「『おのれ、畜生ツ』いふが早い、逃走せんと馳せ退つた先頭の―後備兵は、真向から浴びせかけられ、憐れ其処に唐竹割となつて平駄張つて仕舞つた]」⁷³⁾と部下を斬った事例が報告されている。

また、旅順第二回総攻撃での東鶏冠山砲台への突撃では、歩兵第十二聯隊大隊長が「中隊毎に勇敢の下士卒二十名を先頭と後備に配置し誘導と推進とに任じた、要すれば刺突することも許した]」⁷⁴⁾とある。戦場で歩兵達は背後から銃剣を突きつけられて、突撃を強制されたと考えられる。

(2.5.4) 犯罪の増加

日露戦争時、軍隊内において犯罪は増加の一途をたどった。試みに、「強盗」「過失殺傷」「賭博」「窃盗」「傷害」「逃亡」の件数を見てみよう。「強盗」は1903年には4件であったが、1904-05年の2年間には40件であった。「過失殺傷」は1903年には9件であったが、1904-05年の2年間には41件であった。「賭博」は1903年には22件であったが、1904-05年の2年間には119件であった。「窃盗」は1903年には527件であったが1904-05年の2年間には1307件であった。「傷害」は1903年には57件であったが、1904-05年の2年間には160件であった。「逃亡」は1903年の483件であったが、1904-1905年の2年間には1558件であった⁷⁵⁾

兵士達の逃亡は日露戦争中だけに止まらず、日露戦争後にも続いた。日露戦争前には1600から1700人程度であった軍法会議処刑人員は、日露戦後の1906年に2222人、1907年に1993人、1908年に2130人と増加し、この3年間の罪名別内訳では上官に対する罪が16、22、36と累増し、「逃亡」が606、541、530と大部分を占めていた⁷⁶⁾「逃亡」が大部分を占め、個人的な逃亡脱営に止まらず、集団脱営もしばしば報じられている⁷⁸⁾日露戦後の1908年5月、東京の歩兵第一連隊における兵卒30余名の集団脱営は、軍内部だけでなく、社会全体にも大きな衝撃を与えた⁷⁹⁾

(2.5.5) 精神消耗の増加

「軍隊ハ精神病ノ好培地ナリト唱フルモノアリ通論ニ非サルモ亦は一説ナリ何者在營ノ兵卒

ハ生活境遇ノ激変ニ遭ヒ一軍紀命令ニ從テ行動セサルヲ得スシテ精神上ノ痛苦ヲ感スルコト
尠カラサレハナリ」⁸⁰⁾と陸軍医学学校の1912年卒業式での講演のなかで演説されている。さら
に、「兵卒ノ精神病ニ罹ルモ未タ覚知セラレサルヤ命令ノ実行ハ確實ヲ欠キ或ハ擅恣離役、抗命、
逃亡等ノ犯行ヲ敢テスルノ徒ヲ出スヘシ」⁸¹⁾と軍隊に対する精神病の影響が深刻なものである
ことを指摘して、「精神病兵ノ軍隊ニ対シテ惹起スル禍害ハ甚大ナリ軍務当事者ノ精神病ノ予防
及排除ニ努力スベキハ言ヲ俟タサル所ナリ」⁸²⁾と説いている。

実際、「戦役ニ因スル狂疾ハ神経衰弱症、沈鬱狂、躁狂、妄覚狂一外傷譫妄一麻痺狂、臆躁狂
等ニシテ、是等ヲ軍陣狂ト総称ス」⁸³⁾と報告された兵士達における神経疾患は、入隊後、激戦下
で心身ともに消耗した兵士達の中で増えていった。兵士達の神経疾患の様子を第一師団軍医部
長の鶴田禎次郎は『日露戦役従軍日誌』の中で記録している。その中から、試みに症例を3つ
見てみよう。

31歳軍役夫(第二百例)は「明治三十八年二月出征、韓国上陸、五月頃ヨリ精神異変ヲ示シ、
在再トシテ治セス、十月十四日受診、十六日輪城兵疔病院ニ入レリ、当時耳鳴、頭痛、眩暈、胸
内苦悩、腹部圧痛、便通不整、舌苔、食機不振、食後嘔吐、不眠、独語、記憶衰弱、強迫観念、
望郷心、欲死、応答不確、沈鬱」との症状から「痴愚兼神経衰弱症」と診断され、広島予備病
院に後送された⁸⁴⁾

35歳歩兵(第五例)は「出征後明治三十七年十一月二十六日ヨリ太平溝繃帯所ニ於テ作業ヲ
ナシ、昼夜ヲ徹シテ劇務ニ服シ、二十八日頃ヨリ神経過敏、不眠トナリ、十二月二十九日全治。
三十八年一月一日方家屯ニ繃帯所開設露営後、再ヒ前症ヲ発シ、一月二十六日雪中ヲ行軍セシ
以来、言語動作抑鬱ヲナシ、不眠、疑惧不安乞救、自ラ不治ナリトナシ、之ヲ天罰ニ帰ス一罪
業妄想一」との症状から「神経衰弱性沈鬱狂」と診断され、広島予備病院に後送された⁸⁵⁾

23歳歩兵(第三十五例)は「明治三十七年九月十二日入営、十一月十八日出征、同月二十四
日大連上陸、二竜山戦鬪ヲ経テ其ノ地ヲ守備シ、三十八年二月下旬旅順方面ヲ出発シテ北征ノ
途ニ上リ、三月上旬奉天附近会戦ニ参与シ、五月四日大小屯、八宝屯戦鬪ニ参与シ、爾来八宝
屯守備ニ任シ、八月一日桑樹崗子ノ守備ニ任セリ。八宝屯守備中ヨリ神経衰弱症状ヲ発シ、次
第二増進シ、八月二十日受診、九月ニ入りテ沈鬱ヲ発シ、顔容愁ヲ帯ヒ、殆ト無言ニシテ、時々
流涕ス、曾テ奉天戦ニ際シ後方ニ隠レシコトアリシヲ追想シ、是ニヨリテヨリ怯懦者ナリト笑
ハレ、足ニテ蹴ラルヘシト語ル、応答甚タ不充分ナリ」との症状から「沈鬱狂」と診断され、5
箇所の病院を転々として、最後に広島予備病院に後送された⁸⁶⁾

このように、「罪業妄想」や「望郷心」や「沈鬱」等といった精神症状に代表されるように、
戦場の恐怖は戦線からの離脱を兵士達にもたらして、兵士達の心を蝕んでいった。

おわりに

第二期国定修身教科書は軍人の姿を「陸海軍人は寒暑ををかし苦難をしのぎて勇戦し、或は
弾雨の中に平然として其の任務を尽し、或は負傷すれども後送せらるることを否みて飽くまで
戦場に立たんことを願ひしなど、忠誠勇武なる美談甚だ多し。」⁸⁷⁾と説いたが、歴史的事実から
は、日露戦争において、近代火器の発達に伴って身体の損傷が激しくなり、長期化する戦局に、
心身ともに消耗していく人々の姿が見える。銃剣を突きつけられて弾雨の中へ送られた兵士達、
入院中でさえ戦場に無理矢理連れ戻されそうになる負傷した兵士達の姿が見える。

このように、人々を苦しめた日露戦争の状況が第二期国定修身教科書の背景にあり、軍国美

談として脚色した軍人像を押しつけることによって、戦争で病んだ人々の事実を隠し、将来の戦争に備えて子ども達に戦闘意識を鼓舞させる動機を第二国定修身教科書に与えたと推察できる。

注

- 1) 1907 (明治 40) 年、文部省は「小学校令」を改正して義務教育年限および尋常小学校の修業年限を 4 年から 6 年に延長し、翌年 4 月に実施した。それに伴って文部省は国定教科書を改訂し、1911 (明治 44) 年 6 月に『尋常小学修身書』全巻の修正を決定した。これが第二期国定修身教科書である。『尋常小学修身書』巻一巻二は 1910 (明治 43) 年 4 月から、巻三巻四は 1911 (明治 44) 年四月から、巻五巻六は 1912 (大正元) 年 4 月から使用された。
- 2) 第二期国定修身教科書ではじめて「忠君愛国」の表題が登場した。
- 3) 海後宗臣編『日本教科書大系』近代編、第 3 巻、修身(3)、講談社、1962 年、p. 65
- 4) 成歓の戦闘でのラッパ卒の軍国美談は、木口小平と白神源次郎の二説が伝えられた。どちらもその真相は不明である。木口小平については、木口は第十二中隊に所属したラッパ卒であり、敵に不意打ちされた松坂大尉と行動を共にした可能性があり、「松坂大尉敵弾を受けて斃れ、兵卒にも若干の死傷あり」(参謀本部編『明治廿七八年日清戦史』第一巻、1904 年)との記述から、「兵卒」の中にラッパ卒がいたと考えられるが、ラッパを吹く機会なく死んだと推測できると藤原彰氏は指摘している。「軍国美談はどのようにつくられたのか」藤原彰編『日本近代史の虚像と実像 1 開国～日露戦争』大月書店、1990 年、pp. 253-288
- 5) 沖新編『近代日本教科書教授法資料集成』第五巻、教師用書 1、修身編、東京書籍、1983 年、p. 169
- 6) 同上書、pp. 169-170
- 7) 同上書、p. 170
- 8) 中村紀久二は国定教科書教材に取り上げられた軍国美談について、東郷平八郎や広瀬武夫らが将校といった身分であったのに対し、木口小平は「庶民出身の一兵卒にすぎない。その点では、他の多くの庶民出身の子ども達と同じ境遇である。ここには、将来、子ども達が出征兵士になった際に、子ども達をして庶民の英雄を身近な忠君愛国兵士の具体例として感じとらせるという、教科書編集の意図がある」と位置づけている。(中村紀久二『教科書物語—国家と教科書と民衆—』ほるぷ出版、1984 年、p. 175)
- 9) 日本海軍は旅順港閉塞作戦を 3 回にわたって実施した。旅順港閉塞作戦の目的は、旅順港の入口に古い汽船を沈めて軍艦の通航を不可能にし、ロシア艦隊を港内に封じ込めることであった。ロシア艦隊を港内に追い込んでおいて、夜の暗闇に紛れて旅順港の入口近くまで汽船を進めて、予定した地点で爆破して沈め、汽船に乗り込んでいた兵士達は同行する水雷艇に乗り移って帰ってくるという作戦であった。第一次閉塞開始は 1904 年 2 月 24 日、第二次閉塞決行は 3 月 27 日、第三次閉塞決行は 5 月 3 日に実施された。井口和起『日露戦争の時代』吉川弘文館、1998 年、pp. 84-85、谷寿夫編『機密日露戦史』原書房、1966 年、pp. 688-689
- 10) 海後宗臣編『日本教科書大系』近代編、第 3 巻、修身(3)、講談社、1962 年、p. 73
- 11) 東郷平八郎は元師海軍大将であり、日露戦争の連合艦隊司令長官として日本海海戦の勝利で「聖将」の名で英雄化された。日本海会戦は第二期、第四期、第五期国定国語教科書に取り上げられ、「東郷元師」は第四期以降で登場する。藤原彰編『日本近代史の虚像と実像 1 開国～日露戦争』大月書店、1990 年、p. 254
- 12) 沖新編『近代日本教科書教授法資料集成』第五巻、教師用書 1、修身編、東京書籍、1983 年、p. 181
- 13) 同上書、p. 181
- 14) 同上書、p. 181
- 15) 日本海軍少佐であった広瀬武夫は、旅順閉塞隊の指揮官として第一次、第二次閉塞決行に参加し、第二次閉塞で戦死し、「軍神」として最初に宣伝された。明治天皇から戦死後に恩典が下り、中佐に進級した広瀬武夫は文部省唱歌「広瀬中佐」(『尋常小学校唱歌四』1912 年)としても登場し、国語では第二期国定教科書以降「広瀬中佐」で取り上げられた。藤原彰編『日本近代史の虚像と実像 1 開国～日露戦争』大月書店、1990 年、

p. 253, p. 276 また、広瀬武夫は、修身では第二期から第四期までの国定教科書で取り上げられた。第二期では、巻二第二課「チュウギ」（旅順港閉塞作戦が教材）の直後の第二十一「ヤクソクヲマモレ」で取り上げられている。第三期、第四期では「チュウギ」として登場した。

- 16) 藤原彰編『日本近代史の虚像と実像 1 開国～日露戦争』大月書店, 1990 年, pp. 275-276
- 17) 井上和起『日露戦争の時代』吉川弘文館, 1998 年, pp. 84-85
- 18) 海後宗臣編『日本教科書大系』近代編, 第 3 巻, 修身(3), 講談社, 1962 年, p. 112
- 19) 同上書, p. 112
- 20) 同上書, p. 112
- 21) 井上和起『日露戦争の時代』吉川弘文館, 1998 年, 谷寿夫編『機密日露戦史』原書房, 1966 年などを参考にした。
- 22) 井上和起『日露戦争の時代』吉川弘文館, 1998 年, 谷寿夫編『機密日露戦史』原書房, 1966 年などを参考にした。
- 23) 藤原彰『軍事史』東洋経済新報社, 1961 年, pp. 109-111
- 24) 井上和起『日露戦争の時代』吉川弘文館, 1998 年, pp. 86-88
- 25) 大江志乃夫『日露戦争と日本軍隊』立風書房, 1987 年, p. 152, 原資料は陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第 2 巻第 4 編。ただし, 陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』(防衛庁防衛研修所戦史室所蔵) は非公刊のため, 大江志乃夫『日露戦争と日本軍隊』立風書房, 1987 年で公開されたものを本稿では使用する。
- 26) 井上和起『日露戦争の時代』吉川弘文館, 1998 年, p. 92
- 27) 同上書, p. 92
- 28) 大江志乃夫『日露戦争と日本軍隊』立風書房, 1987 年, p. 152, 原資料は陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第 2 巻第 4 編
- 29) 井上和起『日露戦争の時代』吉川弘文館, 1998 年, pp. 92-93
- 30) 同上書, p. 93
- 31) 日露戦争で戦死者と認定されて靖国神社に合祀された死者数は, 陸軍が 8 万 5208 人, 海軍が 2925 人であり, 陸軍の人的損害は海軍の 29 倍にも及んでいる。大江志乃夫『日露戦争と日本軍隊』立風書房, 1987 年, p. 129, 原資料は靖国神社編『靖国神社誌』1911 年, pp. 41-44, 陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第 6 巻第 26 編「靖国神社合祀人員数」
- 32) 陸軍軍醫學編『陸軍軍醫學校五十年史』昭和十一年刊, 復刻版, 不二出版, 1988 年, p. 50
- 33) 同上書, p. 50
- 34) 大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』岩波書店, 1976 年, p. 129, 原資料は陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第 4 巻第 12 編
- 35) 同上書, pp. 129-130, 原資料は陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第 4 巻第 12 編
- 36) 同上書, pp. 130-131, 原資料は陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第 4 巻第 12 編, 第 3 巻第 14 編
- 37) 同上書, p. 84, 原資料は参謀本部『明治卅七八年 日露戦史』第一巻, 1912 年, p. 51
- 38) 同上書, p. 89, 原資料は陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第 5 巻第 14 編, 歩兵銃と騎兵銃は銃身長のみが異なるだけで, 機関部分は同様である。
- 39) 大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』岩波書店, 1976 年, p. 89
- 40) 井上和起『日露戦争の時代』吉川弘文館, 1998 年, p. 93
- 41) 大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』岩波書店, 1976 年, pp. 85-86
- 42) 同上書, p. 87
- 43) 同上書, p. 91
- 44) 同上書, p. 138, 原資料は陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第 5 巻第 14 編

- 45) 大江志乃夫『日露戦争と日本軍隊』立風書房, 1987年, p. 138, 原資料はエス・グリンスキー述「日露戦争ニ於ケル小銃火」偕行社編集部『偕行社記事』偕行社, 大正3年3月第475号, p. 37
- 46) 陸軍軍醫學編『陸軍軍醫學校五十年史』昭和十一年刊, 復刻版, 不二出版, 1988年, p. 49, pp. 250-251
- 47) 大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』岩波書店, 1976年, p. 157, 原資料は陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第3巻第9編
- 48) 同上書, p. 160, 原資料は陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第3巻第9編
- 49) 同上書, pp. 166-167, 原資料は陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第3巻第9編
- 50) 同上書, pp. 156-157, 原資料は陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第3巻第9編
- 51) 同上書, p. 158
- 52) 同上書, pp. 158-159, 原資料は陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第3巻第9編
- 53) 史料近代日本史・社会主義史料『平民新聞』(四), 創元社, 復刻版, p. 6
- 54) 谷寿夫編『機密日露戦史』原書房, 1966年, p. 204, 『機密日露戦史』は1925年, 陸軍大学専攻科での陸軍中将谷寿夫の講述を公刊した資料。
- 55) 同上書, p. 205
- 56) 史料近代日本史・社会主義史料『平民新聞』(三), 創元社, 復刻版, p. 290
- 57) 史料近代日本史・社会主義史料『平民新聞』(四), 創元社, 復刻版, p. 346
- 58) 史料近代日本史・社会主義史料『平民新聞』(四), 創元社, 復刻版, p. 150
- 59) 史料近代日本史・社会主義史料『平民新聞』(二), 創元社, 復刻版, p. 41
- 60) 史料近代日本史・社会主義史料『平民新聞』(二), 創元社, 復刻版, p. 41
- 61) ただし, 動員下令時に現役在営中の下士卒, 戦争中に現役入隊した兵卒を除く。大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』岩波書店, 1976年, p. 243
- 62) 後備役とは, 予備役(現役を終った軍人が, その後一定期間服する常備兵役)を終えた者の服した兵役。
- 63) 大植四郎編『明治過去帳』東京美術, pp. 703-970
- 64) 大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』岩波書店, 1976年, p. 249
- 65) 陸軍省編『陸軍省沿革史』上巻, 1929年, p. 897
- 66) 大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』岩波書店, 1976年, p. 336, 原資料は陸軍少将竹内栄喜談「戦場における激戦の影響」軍事討論會編『戦陣叢話』第二輯, 1930年, pp. 51-53
- 67) 谷寿夫編『機密日露戦史』原書房, 1966年, p. 492
- 68) 大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』岩波書店, 1976年, pp. 337-339, 原資料は参謀本部『明治卅七八年 日露戦史』附録第二三, 1912年
- 69) 同上書, p. 346, 原資料は原田政治右衛門『日本軍の暗黒面』尚武社, 1914年 pp. 45-46
- 70) 同上書, p. 339, 原資料は偕行社編集部『偕行社記事』偕行社, 昭和11年3月号 p. 73
- 71) 同上書, p. 345, 原資料は津野田是重『奉天に於る乃木將軍 軍服の聖者』(5), 潮文閣, 1927年, p. 435
- 72) 同上書, p. 347, 原資料は軍事討論會編『戦陣叢話』第二輯, 1930年, p. 53
- 73) 同上書, p. 347, 原資料は原田政治右衛門『日本軍の暗黒面』尚武社, 1914年, p. 152
- 74) 同上書, p. 347, 原資料は原田政治右衛門『日本軍の暗黒面』尚武社, 1914年, p. 282
- 75) 谷寿夫編『機密日露戦史』原書房, 1966年, p. 420
- 76) 大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』岩波書店, 1976年, p. 269, 原資料は『帝國統計年鑑』, 陸軍省『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』第6巻第21編
- 77) 藤原彰『軍事史』東洋経済新報社, 1961年, p. 115, 原資料は『陸軍省統計年報』第17-20巻, 明治36-40年による集計
- 78) 同上書, p. 115, 原資料は『東京日日新聞』『国民新聞』1907年9月から1908年5月までによる。
- 79) 同上書, pp. 115-116
- 80) 大正元年第二回「軍隊ニ於ケル精神病ノ原因及影響」, 陸軍軍醫學編『陸軍軍醫學校五十年史』昭和十一年刊,

復刻版，不二出版，1988年，p. 253

81) 同上書，p. 253

82) 同上書，p. 254

83) 荒木蒼太郎（元陸軍衛生補助員・岡山医学専門学校教授）「戦役ニ因スル精神病ニ就キテ」，所収は大濱徹也編『兵士』新人物往来社，1978年，pp. 64-65

84) 鶴田禎次郎『日露戦役従軍日誌』，所収は大濱徹也編『兵士』新人物往来社，1978年，pp. 68-69

85) 同上書，所収は大濱徹也編『兵士』新人物往来社，1978年，p. 66

86) 同上書，所収は大濱徹也編『兵士』新人物往来社，1978年，pp. 68-69

87) 海後宗臣編『日本教科書大系』近代編第3巻，修身(3)，講談社，1962年，p. 112